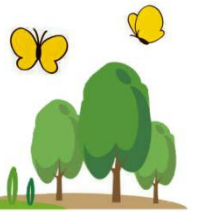


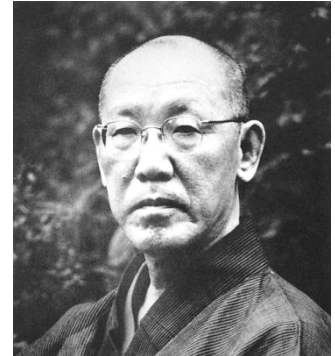


ちよつとそこまで ～お散歩日和（名言編）～



自分というものは良い言葉である。
ある物が独自に存在すると同時に、
また全体の部分として存在する。
自分の「自」の方は、「独自」に存在する。
自分の「分」の方は、「全体の部分」である。
この円満無碍なる一致を表現して「自分」という。

（「安岡正篤一日一言」より）



安岡正篤（まさひろ）という人は、哲学者なのか教育者なのかよく分かりませんが、太平洋戦争を終わらせた「終戦詔書」に最後の赤を入れた人として、または、「平成」という元号名を提案した人として有名です。彼は多くの名言を残している人ですが、私の一番のお気に入り、この「自分」という詩？です。



「ある物が独自に存在すると同時に、また全体の部分として存在する。」とは、数学で言うフラクタル構造と通じるものがあるようにも思います。または、ディズニー・アニメでよく知られた「ベイマックス」に出てくるマイクロボットの姿の方が、私のイメージに近いように思います。いや、「攻殻機動隊」の草薙素子の方かも。

いずれにしても、この「全体であると同時に部分でもある」という発想は大事にしないではいけない考え方、または思考法だと思います。

例えば、教育現場では子供たち一人一人を一個の全体として見なくてはいけないことは自明ですが、同時に、クラスを構成する部分としても見ていかなくては いけません。さらに言えば、彼らは地域社会を構成する部分であり、地域社会は国を構成する部分であり、国は人類社会を構成する部分であり、人類社会は地球生態系を構成する部分であり、その地球は宇宙を構成する部分であり…というように続いていきます。



つまるところ、誰もが、いや何であろうと「より大きな全体」を構成する部分であるということです。したがって、私たちはそれぞれの独自性を保ちながらも全体の秩序を保つ働きをきちんと果たすことを常に意識すべきなのです。そのことを、かつて公害で強く認識したはずなのに、再び地球温暖化で同じ間違いをしていますし、原発を巡る電力問題でも、コロナを巡る感染症対策もしかりです。

理屈っぽい言い方に聞こえたかもしれませんが、「自分の都合のことだけ見るな。周りのことも考える。」と言え、日常生活レベルでの思考法として落ち着きそうです。



ところで、地球の一部であり個々の独立した存在でもあるということからの連想で、「森のようちえん」（宝島社）について触れたいと思います。カメラマンの石亀泰郎さんが北欧デンマークにあるグラドサクサ森の保育園に学ぶ子供たちの生活を紹介した、絵日記のような写真集です。

建物も持たず、毎日バスに乗って森へ行き、朝の9時からお昼の1時まで森の中で過ごしては帰ってきます。毎日が遠足のような楽しい保育園です。デンマークにはこういった施設が70以上もあり、2000人の子供

が園児となっているそうです。目的は、子供の個性を伸ばすこと。読み書きや算数は教えません。教えるのは、森の木や生き物を大切にする心と自立性、皆と力を合わせる協調性だと言います。取材した石亀さんはこう書いています。

「子供たちは雨が降っても雪が降っても毎日森の中に通います。何をしているのかと付いていくと、大木の根株に巣くう虫を眺めたり、腐りかけた樹木の幹に触っているだけだったりします。個人的に自然と対話しているようなことが多く、それこそ自分の好奇心を自分で満たしている姿だと言えるでしょう。」

シェークスピアに「楽しんでやる苦労は苦痛を癒す」という言葉がありますが、何をするにもそこに楽しみを見い出さなければつまらないものです。赤松健の漫画「ラブひな」にも次のようなシーンが出てきます。「勉強でも仕事でも、楽しんでやったものが一番自分の力になるものさ。」とは名言です。



こち亀の両さんにも同じような名言があります。

「人生はビッグゲームだぞ！面白おかしく生きた方が勝ちだ！」

確かにその通りではありますが、ここまで達観していると傍迷惑な臭いもぷんぷんさせているのが気掛かりです。

ところで、更に石亀さんは気になる発言をしています。

「森のようちえんの子供たちは静かでした。驚くほど敏捷でしたが、声が少ないのです。」

大人の顔色をうかがったり、わざとらしい子供がいないと言います。私たちは、これまで「自分のことははっきりと言う」ことの大切さを説き、それを自己主張として表しなさいと教えてきたように思います。自己主張は、「私はここにいますよ。」という声のことです。それは大勢の中で忘れ去られていく「恐れ」への対抗手段だとも言えるでしょうか。

例えば、何かの集いでお菓子が配られる時、中にはもらえない人がいます。そんな時、「私はもらっていない。」と主張しないともらえないままで終わってしまう。だから言うべきことはちゃんと一言なくちゃ！の論理で諭していたように思います。どの社会であろうと、自己主張はある程度は必要だと思います。

でも一方で、「声の大きい者が勝つ。」という弊害も生み出しているように思います。マスコミやSNSなどはその最たるものでしょう。目立つ人が得をする世の中と言った方が適切かもしれません。

その点、「森のようちえん」の示唆するものは、未来を担う子供たちには自己主張よりも「人の痛み」に気付く子に育って欲しいとの願いにあるように思います。それを私たちは、「心の豊かさ」と称しているのではないのでしょうか。

(終)

